

超高齢社会における予防理学療法士の役割

2020年3月23日

日本予防理学療法学会

代表運営幹事 島田 裕之

【若手理学療法士への期待】

人口の高齢化に伴って、疾病構造の変化に応じた社会保障制度の見直しが余儀なくされています。限られた財源で効率的な健康保険運用をするためには、費用対効果の高い「予防」を推進する必要があります。しかし、科学的エビデンスが不十分であるために、保険者である国や地方自治体は積極的に「予防」に対して舵を切れない状況にあります。予防の効果が出るには数年から数十年の歳月が必要であり、今後の日本における少子高齢化の進展を考えると、緊急に予防対策を講じなければなりません。そのための科学的エビデンス創出のために、予防理学療法を推進すべきです。

予防理学療法とは、「国民がいつまでも参加し続けられるために、障がいを引き起こす恐れのある疾病や老年症候群の発症予防・再発予防を含む身体活動について研究する学問」です。従来の理学療法では、障がいを持った対象者の重症化や再発予防である三次予防に焦点をあてた対応をしてきましたが、予防理学療法では、障がいを持つ前に健康増進のための一次予防やリスクの高い対象者の発症予防である二次予防に焦点をあてた、新しい理学療法の学術領域です。この領域を推進することで、理学療法の対象領域が格段に広がり、理学療法士の活躍の場が増え、社会的な理学療法の価値も向上すると考えられます。

そのためには、まず予防理学療法がどのような効果を持ち得るのか学術的に証明しなければなりません。日本予防理学療法学会は、会員の皆様が学術的な議論をする場、情報収集ができる場です。多くの会員が集うことで多くの情報が集積できますので、ぜひ当学会にご参加いただきたいと思います。これからの日本の元気を保持するためには、理学療法士の力が必要です。まだまだこの領域で活躍する理学療法士が足りていません。共に学び、一人でも多くのひとが病気にならないよう手助けしてくれる会員を求めています。

【関連する他領域との共通点と差異】

理学療法全体に対していえることは、大多数の対象者が高齢者であることです。とくに日本地域理学療法学会と当学会は、高齢者を中心とした研究活動が盛んに行

われています。もちろん重複する部分ではありますが、日本地域理学療法学会では三次予防の研究が盛んで、日本予防理学療法学会では一次予防と二次予防の研究報告が中心となっています。

【近年のトピックス】

予防理学療法では、介護予防、地域包括ケアシステム、メタボリックシンドローム、ロコモティブシンドローム、廃用症候群、認知症、労働災害、再発予防、スポーツ障害、スポーツを利用した予防、メンタルヘルス、ウィメンズヘルス、メンズヘルス、ヘルスコミュニケーション、コミュニティー・プロモーションなど多岐にわたる領域が対象となり研究が進められています。

これ以外にも、今後の周辺科学領域の進展によって予防理学療法の取り扱う分野も増えてくると思います。例えば、AI や IoT に関する医療応用が急速に進展してきているため、予防理学療法領域においても、これらがホット・トピックスになるかもしれません。

【今後充実を図りたいこと】

新しい社会的ニーズに対応するために、予防理学療法を学問体系にまとめていく必要があります。そのためには、質の高い予防理学療法の実践と研究ができる人材を増やす必要があります、その実現のためには、教育と環境が重要です。教育のためには、良質な資料の作成や情報収集や議論できる場の提供が必要でしょう。また、環境としては理学療法士が安心して働ける場の創出、研究ネットワークの構築、研究費確保等の課題が山積しています。日本理学療法士学会では、これらの課題を解決し、多くの理学療法士が予防のために活躍できる環境を整備するための努力をします。